

(社)日本建築構造技術者協会 中部支部設立のご挨拶

支部長 渡辺 誠一



昨今の建築業界は大変多忙をきわめておりますが、会員の皆さん方も、多忙に負けず益々ご活躍のことと思います。

さて、ご案内のように、昭和63年度の構造家懇談会中部支部総会、ならびに日本建築構造技術者協会中部支部設立総会は平成元年6月28日に無事終了致し、7月1日付をもって建設大臣より許可を受け、日本建築構造技術者協会が法人として発足致し、それにより中部支部もスムーズに法人下の支部となったわけでありませう。

そして、その披露が9月28日に支部関連の行政の方々、関係団体、ならびに大学関係他多くのお客様をお招きして盛大に開催することが出来ました。また、同時に行なわれたオープンの記念講演会も二百数十名の参加者があり、大成功でありました。特に、記念行事実行委員会の皆さんには、大変なご努力をいただき、また、一般会員の皆さんのご協力に敬意を表するものであります。

このようにして、私共の団体が社会の人々からお認めいただいた以上、その責任は重いものがあります。

私共の支部活動は、協会の目的にそった地域に根ざした活動が中心、となるわけですが、中部支部は静岡から富山までの東海北陸7県に在住する会員から成っておりますので、その地域性を考慮した各地区活動をきめ細かに行ないつつ、支部としてまとめることが必要であります。

従来、構造担当者は横のつながりがほとんど皆無であったのですが、7~8年の間に構造懇、そして今日の協会へと全国の構造家は集結したわけでありませうから、その力は誠に大き

いものがあると思います。しかも、来賓のお祝辞の中にありましたように、その法人化は異例に早いということでありませう。それはとりもなおさず、会員各位の活動がきわめて活発であり、その業績が認められたこと以外の何ものでもありません。

私共は、そのような実績を踏まえた上で、支部活動を通して会員相互の親睦を計り、技術のレベルアップを計る。個人ではなし得なかつたことも、団体としてなら可能なことが多々あると思います。例えば、私共の仕事、職能を広く世の人々に知ってもらふ活動もその一つでありませう。

支部活動として企画された行事等に会員の皆さんが出来るだけ多く参加していただくこと、これが支部活動の源であります。そして将来の構造家のあるべき方向を、行政を含めた建築界の中で考えていこうではありませんか。

会員の皆さんのご協力をお願い致します。

(社)日本建築構造技術者協会 中部支部設立を祝して

(社)新日本建築家協会東海支部長 税田 公道

貴協会が念願の公益法人化を達成され、過日中部支部が発足されましたことは、私共この地域にある建築諸団体にとりましても誠に心強いものがあり、貴団体の今後益々のご発展を心から祈念してやみませう。

振り返ってみますと、20世紀は科学技術が飛躍的に発展を遂げた世紀です。科学技術には国境が無く、社会制度や国家から独立し、自由に発展し拡大してゆく特性を持っています。それ故に、と



もすれば思想や哲学を欠き、そのような人々の手によって大量殺戮め手段として利用もされてきた苦い経験を私達は持っています。

生態系の中であって整合し、発生から使命終了まで自己完結させる技術が人類の発展に貢献して始めて科学技術と呼べるものであることの定義が、今改めて深く問われているゆえんでもあります。

「原子力発電の技術は完成され絶対に安全である」という論議と「絶対に安全な技術など有る筈がない」とする議論は、この定義に照して始めて白黒の判断の対象となり得ます。

自然界に存在しない物質を作り出し、その廃棄物を自然界に還元出来ない今の技術は、自己完結しない点でも、反エコロジーな点でも科学技術とは呼ばれません。

哲学を欠く技術の行き着く先が人類の破局であることを見据えながら、建築技術もまた、エコロジーに立脚しつつ自己完結する系として発展させなければなりません。

学問としての建築構造学が、これからの様々な建築物に用いられ、人々に幸福をもたらす上で一層の進歩が望まれる今日、ともすれば華々しいステージの陰に隠れていた構造家にスポットが当てられた貴協会の公益法人化はその意味でも大変重要かつ画期的な意義を持ちます。

会と会員が更に一層の研鑽を積み、社会に貢献されることを願い、友好団体からの連帯の祝辞といたします。



—構造計算の前にあるもの—

名古屋大学工学部建築学科教授 多賀 直恒

21世紀の建築構造設計をどのように予測するか？国際化・情報化・高齢化を10年後に控えて我々建築に携わるものは将来をどの様に予測するかが重要な鍵である。建設技術の役割と技術者の立場の確立を目的に考えると、技術全般に関する視野を広く持つこと、社会的営為の中で社会基盤整備における建設技術の位置付けをする時期であり、国際化と地域化のバランスを保つため、将来の予測、目標の設定、職業意識の確立、社会的地位の確立は建設技術の必要な要請と考える。

生活の目標が、利潤や効率といった物からゆとりと安らぎと潤いが生活の中心になり、時間の使い方に工夫をする時代になると思われる。機能と効率を目的にした時代から、付加価値と新しい価値を評価する考え方への転換を迫られ、人々の生き方に多様化が更に浸透して、個人の立場を主張することが多くなり、都市や建築はその多様化とその対応を考えねばならない。

設計を行う手段として計算機の発達により解析方法は飛躍的に進歩を遂げた。施工技術の開発により超高層の建設や軟弱地盤での施工が可能となった。設計思想も建築構造様式の変化もさることながら、許容応力度設計法から限界状態設計法へと其の適用の



会場で歓談される多賀先生

努力がされてきている。このような解析手法、建設技術、設計思想は現代の建築構造に重要な役割を果たすものであることは間違いない。解析方法を駆傾して建設技術を十分に活用することは、種々の構造の新しい姿を生み出すために必要な努力であった。しかし、設計や施工に当たる前に我々が考えておくべきことはないだろうか？ 構造の一研究者として地震災害の現場で建物の破壊状況を見て考えさせられる問題は、解析方法の欠陥や施工方法の未熟さというよりも根元的な建築構造に対する構造判断規範の必要性ではないかと思われる。それは人間の直感と経験で培われるもので、科学的な根拠というよりは単純な構造を見る目安とでもいうものであろう。

木造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造など各種の建物を列べ、それぞれの構造上の特徴、設計施工の現状、建物種類別の実数などを考え合わせると、地震に対する構造物の安全性と言う面で最も関心を注ぐ必要のある建物は、中低層の鉄筋コンクリート造建物ではないか。この種の建物は剛なために作用する地震力が大きくなること、慣れもあって設計が機械的になりやすく施工が粗雑になる恐れもあることが考えられること、建設される数が圧倒的に多いことなどいくつかその理由が挙げられる。

1968年の十勝沖地震によって鉄筋コンクリート造建物の被害が特に目立ち、鉄筋コンクリート造建物の設計法が問題となった。以来この種の建物の計画法、設計法、計算法の再検討が進められ、建築基準法が改訂され新しい耐震設計法が制定され具体的な対策も実施され今日に至っている。柱、壁、梁、床を一体にした鉄筋コンクリート造建物は概して複雑で、構造計算にのせるには経験や工学的判断に待たねばならないところが多い。また、構造計算はある仮定と条件のもとに組み立てられているものであり、そこには基本的な設計精神が流れている。この様な点を抜きにしては構造計算は考えられない。地震によって構造物が破壊した状況を観察すると真っ先に頭に浮かぶものは構造計算のあり方の問題である。それ以来、構造計算が機械的に終わらない様にする手段、地震時に建物の中での地震力の流れ、最終耐力と終局状態に至る過程での建物の挙動を大まかにでも描く手段が求められないものか、建物の地震による被害状況を見る度に良い考えはないものかと思ったものである。

技術が進み解析方法が精密で高速になってどんな複雑な構造でもたちどころに計算は出来るが、その建物がはたしてどのような壊れ方をするのか、また構造計算によりでてきた数字の意味をどの様に工学的に解釈するかが重要な鍵である。構造計算の設計方法の背景と設計対象としての建物と解析された結果の数字が十分に関係づけられているか。

鉄筋コンクリート造建物は、壁によって生かされもし、また殺されもする。関東地震の被害報告に震災予防調査会の第百号（丙）というのがある。そこにはこの地震で被災した鉄筋コンクリート構造物の被害状況が詳細にわたって調査され記されているが、特に其の要約の中で壁に関する事項である。当時は確立された解析方法もなければ、設計方法もなかった時代である。しかし被害を受けた建物と被害のない建物の差異は壁の量であることをうかがわせている。しかも壁が適量あってもその配置が不均衡であれば被害を免れないと指摘されている。鉄筋コンクリート造の地震被害と壁量の関係について後に調査を行った中川、亀井、黒正によると、一階にお

ける張間、桁行の各方向の鉄筋コンクリート造壁の水平断面の総長を各階の床面積で割った値即ち壁率と地震被害を調査している。関東地震、福井地震による被害の調査結果を勘案すると、一平方メートル当たり15センチ以上の壁量の建物は無被害であったということになる。志賀は十勝沖地震の際被害の著しかった建物の多くが壁量の少ない建物に属している点に着目し地震被害と壁量の調査を行った。壁率の他に一階における柱・壁の均しのせん断応力度をもとりいれて検討された。一階における壁率と柱・壁均しのせん断力によって無被害建物と被害建物が明確に区分されるという結果を示している。これが周知の志賀マップである。

これを発表したのは1975年であった。鉄筋コンクリート造建物の構造計算が、ややもすれば機械的にながれて建物の地震時の特性を十分に理解されていない部分をこの調査結果は地震被害との状況を巧妙に説明する単純な指標を与えている。目でみて直感的に判断される壁のおおよその配置と壁量から被害を防ぐことは可能ではないか。文明の進んだ現代、複雑で精密な解析のできる時代に経験と直感で構造物を設計するとは時代錯誤も甚だしいと言われるかも知れない。しかし高性能の機械やあるいは解析方法を十分に使いこなすためにはこの様な最初のアプローチも必要ではあるまいか。構造設計をするのに必要なものは、解析技術、施工技術を充分理解し活用することであるが、その前に構造のもつ形、材料、構造成法に基づく構造的性質を見抜くセンスが重要であると思われる。これは人間がもつ構感性と呼びたい。鉄筋コンクリート造建物では壁の評価がこの感性につながるものである。

参考文献

- 1) 中川恭介、亀井勇、黒正清治、“鉄筋コンクリート建物の壁率と震害の関係”、日本建築学会論文集、No.60、昭和33年10月、309-311
- 2) 志賀敏男、“鉄筋コンクリート造建物の震害と壁率、柱率自然災害資料解析、2 (1975)、46-55
- 3) 多賀直恒、“構造物の被害尺度”、日本建築学会東海支部研究報告、昭和56年2月、65-68
- 4) 多賀直恒、“既往の地震による鉄筋コンクリート構造物の被害性状に関する考察(1)(2)”、日本建築学会東海支部研究報告、昭和54年2月、97-104
- 5) 震災予防調査会、“震災予防調査会報告第100号（丙）”1925（大正14年）3月、311-333

中部支部設立によせて

副支部長 本郷 智之

1981年10月に僅か39名の支部会員で発足した構造家懇談会中部支部が、その8年間の活動を終えて、228名という大勢の会員で、新たな組織である(社)日本建築構造技術者協会(以下JSCA)中部支部が発足したことは正に隔世の感があります。と同時に、全国の建築構造技術者が、5000名と言われる中で、2500名の会員を擁する会にまで発展したことを思う時その責任の重大さを感じないわけにはいきません。ここで、新たな発展を目指して、過去8年間の支部活動を振り返ってみるのも意味あることと思います。



左端筆者

過去8年間、会員の多大な努力と関係者の協力により、表1、2に示すような各種の事業や研究活動を行って参りました。事業一覧表を見ると、活動内容を建築構造に限定せず建築家を含めたデザイナーの講演会等も行われています。又、多くの企画は会員のみ限定せず、世間に開かれた会の運営主旨にのっとり、一般にオープンな形にした結果、多くの会員外の参加も得て開催されています。技術委員会の方は会員の技術力の向上を目指し、その時々テーマを取り上げ活動をして来ましたが、その多くは、支部会員に毎年「技術委員会報告会」の形で還元して来ましたが、その成果は表1に示す資料としてまとめられています。一部は対外発表もして来ましたが、しかしその多くは、既成の資料の収集とまとめという形で独自の見解の提案にまで至っていません。その中で、鉄骨柱脚関係、愛知県構造チェックリスト、構造設計例集は我々構造設計者でなければ出来ない労作と言えるでしょう。図1(9頁)に中部支部会員数の推移を示します。今年の法人化時の大々的な会員増強運動以外には積極的な運動をしなかったにも拘らず、活動の発展と共に順調に会員数が増大し

たことを示しています。この3つの図表を見ての感慨や感想は皆さん個人に任せましょう。

法人化が成り支部会員数が200名を越えた中部支部の今後の活動は、JSCA全体の動きをみていると、より積極的な機動的活動が要求されると思います。設計規準くらいは自分達で作るんだという気概が必要とされるでしょう。又、そうしなければ折角苦勞してここまで作って来た中部支部も仲良しクラブに終わってしまいます。未曾有の建設好況の中で、会員の皆様が忙しく働いておられる事はわかりますが、若い世代に構造設計が魅力あるものに映るよう頑張りましょう。

表1. 中部支部 技術委員会研究成果

年度	研 究 成 果
1982	1. 応用分科会 保有水平耐力算定法、形状係数、A i 分布 2. 鉄骨分科会 巾厚比、積補剛、トラス、筋かい、柱脚 3. 地盤分科会 杭の水平抵抗、杭頭、地盤の液状化 4. RC分科会 壁の剛性評価(垂れ壁、腰壁、袖壁)と終局耐力
1983	1. 研究分科会(失敗例) 2. パソコン研究会 (パーソナルコンピューター利用状況に関するアンケート結果のまとめ) 3. 地盤分科会(杭工法について) 4. RC分科会 (RC壁の剛性評価・耐力評価に関するアンケート調査)
1984	「柱脚の設計と施工」
1985	杭及び杭に接合する部材の設計 コンクリートのひび割れについて
1986	愛知県構造チェックリスト及び解説編 1. チェックリスト(基礎事項、基礎・RC造・S造・SRC造) 2. 解 説 編(上記項目に対応する記入要項及び内容解説) 愛知県では、上記内容をもとに63年6月より実施予定
1987	1. 構造計画例 2. 愛知県構造チェックリストの運用について
1988	1. 柱脚を考える 2. 構造設計例集(1986年～1988年のまとめ) 3. 基礎分科会 場所打ち杭の鉛直耐力、地盤の液状化、地下空間の利用技術

表2. 構造懇中部支部事業部一覧表

年度	月・日	分類	題 目	出席者数
1981	10. 30 1. 26		支部設立総会 第1回行政（愛知県、名古屋市）との懇談会（以降毎年開催）	34
1982	5. 22 9. 4 9. 25 1. 29	P D 座 P D 報	新耐震設計法について 構造設計法の移り変わりーⅠ 建造物の応力はどうなっているだろうか 技術委員会報告会	22 40余 40
1983	5. 7 7. 16 8. 20 10. 29 1. 28	座 見 見 講 座	構造設計法と施工法の移り変わりーⅡ 名港ポートビル 鹿島建設武平町ビル 中部支部設立2周年記念 建築家からみた構造設計 構造家からみた意匠設計 構造設計法の移り変わりーⅢ	40余 24 15 187 37
1984	5. 19 6. 2 11. 16 1. 12 1. 30 3. 23	報 見 座 報 習 見	技術委員会報告会 日本生命名古屋駅西ビル 構造設計の移り変わりーⅣ 技術委員会報告会 R C構造の設計 新日本製鐵名古屋製鐵所	20余 10 23 21 90
1985	5. 11 7. 7. 20 10. 19 12. 14 1. 18 2. 15	講 見 見 講 座 報	地震動の性状 広報紙「構造懇中部」No.1 発行 東海産業短期大学 コンクリートの現状と問題点 ー耐久性ー 中部支部設立5周年記念 建築家とコンクリート 生コンについて メキシコ地震被害調査	33 47 41 125 34 63
1986	5. 17 6. 28 7. 5 10. 4 11. 29 1. 17 2. 20	報 講 見 見 講 講 見	技術委員会報告会 新しい構造設計法ーL R F D試案 名古屋市総合体育館 60ーアーバニア千代田市街地住宅 都市設計とコンピューターグラフィックス 建築C A D米国視察 S R C規準改定こぼれ話 名古屋市地下鉄6号線名古屋駅工事	30 53 31 45 87 37 31
1987	4. 23 5. 16 7. 25 9. 19 10. 17 12. 5 1. 23 2. 23 3. 19	習 報 講 見 研 講 講 講 講 見	鉄骨構造の設計に当たって・バランスの追求 S建築構造ー実例と解説（名古屋） 技術委員会報告会 シェルから膜構造へ 集成材・製造工場と建物 名古屋地盤と建築基礎 米国での木構造の現状と構造設計 自動車におけるデザインコンセプトの構築 デザインコンセプトの構造 ヨーロッパで考えたこと 鉄骨構造の設計に当たって S建築構造ー実例と解説（金沢） AMN A T	93 30 33 18 30 27 119 33 77 34
1988	6. 18 7. 29 10. 1 10. 22 11. 26 1. 26	報 講 講 講 見 見 讓	技術委員会報告会 鉄と構造設計 Capacity Design Approach for Moment Resisting Reinforced Concrete Frames 免震を考える 白鳥センチュリープラザ 東山展望塔 ニューフロンティア時代 ー宇宙・海洋・地上空間への発展ー	35 88 56 47 32 36

記念講演会要旨

「塔の思想」

東京大学生産技術研究所 原 広司教授

本日は、ごく一般的に、普通の人の目から見た『塔』の話しをさせていただきます。世界的に、実にたくさんの塔があります。そうした塔の記憶を、お互いに話し合ったことはないけれど、

もし、人々の意識をのぞくことができれば、かなり共有した塔のイメージを



持っているのではないかと思います。塔と言いますのは、門・橋・道などと同様、建築の要素であると同時に、都市の要素であります。多くの古くからの都市は、塔をひとつの軸にして形成されました。

塔はモニュメンタルでシンボリックで、大抵それは、空に対応している訳です。宗教的であるにせよ、ないにせよ、非常に敬けんな感情を表現し、人々の心をとらえる様な仕組みになっていると思います。

新しい建築のあり方を考えるときに、私は、コレスポンシブな建築、応答している建築というイメージがあります。

何に応答しているのか、本当は人と人が応答する。たとえお互いに知らなくても、誰かが応答している、という様な関係が建築によってできないものであろうか。それが、建築のひとつのあり方であると考えている訳です。

塔というものは、元々、通信機能を持っているものが多いと多く、お互いに応答する関係にある訳です。「応答せよ。応答せよ。」と誰かが言っている。塔が言っているのかもしれないし、宇宙が言っているのかもしれない。それに対し、塔自身もどこかへ「応答せよ。」とくり返している。つまり、受信すると同時に発信するという「かたち」が、塔の基本的な性格ではないかと思えます。

何か遠い宇宙からの呼びかけ、問いかけ（例えば、人間は何故生きているのか？）に、答えていきたい。たとえ答えることができなくても、「宇宙からの問いかけがあることは判っている。」と言いたい。また、「その問いかけを確かに受けとめました。」と言いたい。それが塔を建てる行為ではないかと思う訳です。

補) 講演の中で、ミースのスケッチ、サマラの塔、イスラムの塔など、多数のスライドを見せていただきました。

文責 広報委員会

「日本の構造技術・この100年」

(社)日本建築構造技術者協会副会長 木村 俊彦

技術が中心になって建築がつくられ始めた時代というのは100年ぐらい前にスタートしていると思います。1890年の博覧会でエッフェル塔が出来たわけですが、丁度それから100年の間産業革命により科学が人類に幸せをもたらした豊かな物資を提供し、また近代国家、近代経済というもので色々な人類の不幸を取り除いていこうという努力、動きが歴史的に順々に大きく育ってきている。建築の構造技術というものもその時期から全部進歩していると思う。構造に使われている技術というものは産業革命以後、エッフェル塔の出来る100年前から一世紀の間、大きくなってきている。皆さん構造技術者協会の構造設計家達も、その路線の上で社会的に需要の拡大しつつある非常に貴重で大事な仕事をこなしておられる。その軸線は太くなってきている。建築のデザインとか風潮とか、それに対する社会の関心というものは必ずしも技術の進歩に比例して進んでいない。技術とか構造とかは単調増大で前向きに進んでいるにもかかわらず、流行とかデザインは多少気紛れで、軸線の上で凹凸を描いている。その凸が出来た時に建築の1つのピークが生じると思う。

第1のピークは産業革命から出来た鉄・ガラスとかをヨーロッパの建築界が謳歌した時期。次はアメリカに飛びまして第2のピーク。空間を積み重ねて塔を作っていくエンパイヤステートが1925年に出来、その頃はもう100層近い床を人間が水平に動けるようになっていた。3層であるエッフェル塔を超えている。第3は戦後にあるわけで、その時代から私も建築の戦線に参列したわけですが、テクノロジカルアプローチと言う言葉を使って技術を表に出して建築を作っていく。溶接をした鉄骨・アルミサッシ・軽量コンクリートとか近代建築の中で全て定着し、現代の建築を支えている基本的な技



中部支部設立記念行事報告

記念行事実行委員会

暑かった夏も束の間に過ぎ去り、秋を感じさせる頃となった去る9月28日、中部地区の幾多の構造家が待ち望んでいた社団法人化を祝う記念行事がホテルキャッスルプラザにて関係官庁、学会、関連団体、業界の御支援の元に盛大に行なわれました。

記念行事としてまず、午後3時より3階孔雀の間にて建築家であり、東大生研教授原広司先生による「塔の思想」と、我々の大先輩であり構造設計界の牽引者である木村俊彦先生による「日本の構造技術・この100年」と題した講演会を開催しました。

当初の予想を大幅に上回る 227名の方々が熱心に2時間30分にわたって拝聴し、日頃の多忙な業務を離れ改めて設計行為の原点を見詰め直すことが出来たと思われまます。

両先生の講演内容は後に詳しく掲載されています。

講演会に引き続き5時30分から7時迄4階鳳凰の間にて設立披露パーティを盛大に催し、こちらも予想をはるかに上回る135名の方々に御出席いただきました。渡辺支部長、矢野会長の挨拶に始まり、関係官庁、学会、関連団体、業界の各代表者から、8年前の構造家懇談会設立当時をしのぶと共に、今日迎えた法人化への御祝詞、今後のJSCAへの幅広く柔軟な活躍を強く期待されるお言葉をいただきました。又、多くの方々により時間の許す限り、会場一杯に心暖まる交歓風景が繰り広げられました。

思いおせば構造家懇談会設立記念パーティが30数名で行なわれたのに比べてこれだけ多くの方々に参画いただけたのは隔世の感があり、構造家懇談会設立当時苦勞された支部幹部の方々は感量であったと思います。具体的な式は次の通りでした。



記念パーティー受付風景



松岡教授
万歳三唱

来賓懇談風景



講演会次第

- | | |
|-------------------|---------------|
| 支部長挨拶 | 渡辺誠一 |
| ・「塔の思想」 | 東京大学生産技術研究所教授 |
| | 建築家 原広司 |
| ・「日本の構造技術・この100年」 | |
| | 構造家 木村俊彦 |

パーティー式次第

- | | |
|---------------|------|
| ・支部長挨拶 | 渡辺誠一 |
| ・会長挨拶 | 矢野克巳 |
| ・来賓挨拶 | |
| 愛知県建築部長 | 浦上和彦 |
| 愛知建築士会会長 | 水野洋生 |
| 建築家、東大生研教授 | 原広司 |
| ・乾杯 | |
| 副会長 | 木村俊彦 |
| ・来賓祝詞 | |
| 新日本建築家協会東海支部長 | 税田公道 |
| 愛知県建築士事務所協会会長 | 近藤一夫 |
| ・万歳三唱 | |
| 名古屋大学教授 | 松岡理 |
| ・閉会挨拶 | |
| 記念行事実行委員長 | 大塚一三 |
- 我々 JSCA 中部支部の会員として、かくも盛大に記念行事を開催できたことを深く皆様に感謝致します。

術になっていると思う。構造技術者が新しく建築を変えていく力、良い方に美しい形になる力を期待し引き出された時期である。第4は単一の超高層で、それらは独立の建物が出来るだけ高く美しく出来て来たと思う。今が第5のピークで、複合超高層、連結超高層等の複合体である。その中に免震的、制震的効果をはっきりさせるということも含まれる。いづれにしても5つのピークは世の中の景気とかデザインの流行・廃りで起伏があって、社会的な基礎産業の底辺が充実してきたものが多少遅れて建築に反映されながら、いつも単調増大で登り坂で進んで来たと思う。

私は、構造技術者の皆さんの仕事というのは、世の中で絶えず必要とされているものであり、その流行とかでバイブレーションをおこすものではない。技術そのものの発展は変わらないのだと強調しておきたいと思います。

(補) その他に先生がデザイナーを志しその後構造にのめり込まれたまでの楽しい話、100年前のエッフェル塔のユニークな構造計算方法、更にスライドを使つての作品介绍で、エッフェル塔と20世紀の日本で塔(水戸の塔)を作ったら、このような塔も出来るぞ! また幕張メッセのホットな情報等がありました。

文責 広報委員会

記念パーティーを閉じるに当たってのお礼の言葉

記念行事実行委員長 大塚一三

大塚でございます。今日は構造家懇談会が法人格をいただき、社団法人日本建築構造技術者協会と改組したのにもない、構造家懇談会中部支部も新しい組織の中部支部に移行すると言うことで、記念講演会と記念パーティのご案内を申し上げたところ、皆様いろいろとお忙しい中をこのように多くの方々のご出席を戴き、企画致しましたものとして大変有難く感激しているところでございます。厚くお礼を申し上げます。

思い起こしますと、もう8年になります。昭和56年月に懇談会が正式に発足し、同じ年の10月30日、名古屋郵便貯金会館で中部支部設立総会を開きました。支部会員39名中34名が集まり、ご出席戴いた来賓は11名でした。今日の盛会な様と比べて、8年の歳月の重さをいましみじみと噛みしめているところでございます。

先程の木村副会長の講演の中にシェイクスピア劇場がでてまいりましたので、これに引っかけてお話致しますが、“すべては時がくるまでは熟さない”。ごく当たり前の事ですすがシェイクスピアが言ったとなると何か特別の響きを持ってき

ます。長い時間をかけて多くの会員の努力と、これを支えてくださった方々の好意によって得られた法人格であります。

“世にあるものはすべて手に入れてからより、追いかけているうちが花なのだ”。これもシェイクスピアの言葉ですが、会の運営はこれからが本番であることを会員の皆さんと共に確認し、行動することによって今日お集まり戴いた皆様のご好意に応えたいと思います。



もともと懇談会の発足は、矢野会長の挨拶にもありましたように、新耐震設計法の施行にほとんどカヤの外に置かれた構造実務技術者の、自分達の職能に対する危機感とその大きな発端であったわけであり、例えば多少悪いかも知れませんが、リア王に出てくるエドモンドの台詞、“私生児は自然の本能が人目を忍んで燃え上がる時作られるのだ、体力も気力も人一倍充実しているぞ”の気概もあつたように感じています。その上での法人化をどの様に取り込むのでしょうか。私はこれを次のように考えています。二次元の図形を見るには、三次元の目を持っていないと全体が見られない。構造を見るには構造を包むもう少し大きなところから物事を考える必要がある。その意味で今回の法人取得は意義があるのだと。

“もともと地上に道はない。みんながあるけば道になるのだ”と言ったのは中国の魯迅ですが、私たちは自らの道を自らの努力で切り開いて行きたいと思ひます。今後とも皆様の暖かいご支援をお願い致します。

最後に内輪の詣でご来賓の方々にはまことに恐縮ですが、今日のお膳立てをして戴いた会員の皆さんに一言お礼を申し上げたいと思ひます。私は今日の行事の実行委員長と言うことで、もともともう少し密やかにやろうと言う話があつたのを、少し派手にやろうではないかと言ひ出した張本人であります。実際には森田さん初め皆さんの努力に全くおんぶした恰好になりました。お陰様で従来にない形の開かれた会合が持てました。ご苦勞さまでした。

(社)日本建築構造技術者協会中部支部の概要

構造家懇談会が今回法人化した主旨や経緯について皆様に度々述べて采ましたので充分御理解戴けたと思います。いよいよ(社)日本建築構造技術者協会としての新たな活動が始まります。以下に新しい組織を紹介致します。皆様の積極的参画を期待致します。

1. 支部会員 (89年8月10日現在)

正会員 228名 内訳 愛知県 157名 石川県 18名 岐阜県 10名 三重県 5名
 静岡県 18名 富山県 12名 福井県 8名

準会員 4名
 賛助会員 95社 (支部に支店営業所を持つ賛助会員)
 学会会員 11名 (支部在住の学会会員)

JSCA 中部支部の会員入会状況は右図の様に推移しており、法人化を機に大幅な組織の拡大を示しています。更に会員各位には新たな仲間を紹介して戴き組織の充実に御協力下さい。尚会員紹介に際しては、入会申込書の控を中部支部事務局宛御送附下さる様お願い申し上げます。

(社)日本建築構造技術者協会中部支部事務局

住 所 名古屋市中区栄4-15-32 日建・住友ビル
 電 話 052-261-6131

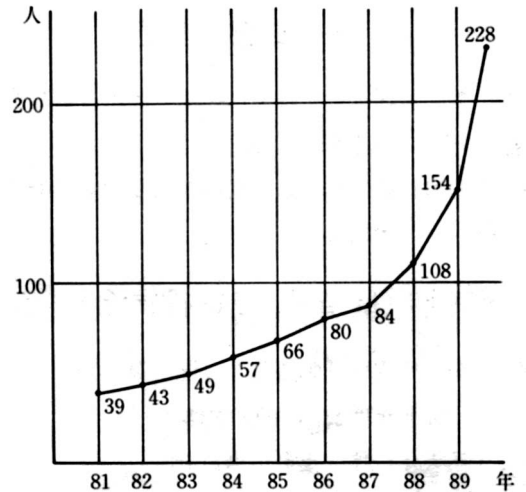
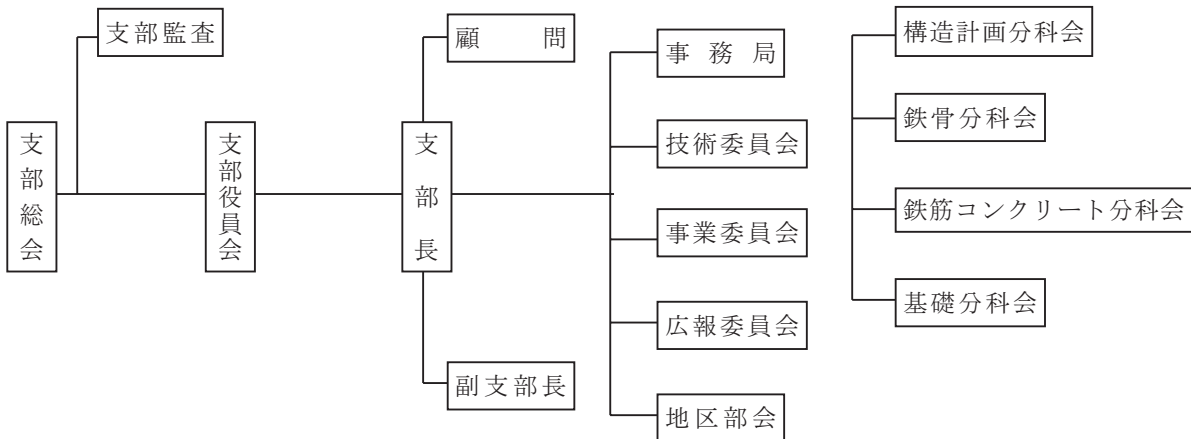


図1. 中部支部会員数の推移

2. 支部組織



3. 支部役員 (平成元年度、アイウエオ順)

- ・ 支部長 渡辺誠一
- ・ 副支部長 本郷智之(技術)、森田富士男(事業)
- ・ 支部幹事 遠藤茂之(広報)、大石博司(静岡)、大塚一三(記念行事他)、小西義昭(北陸)、
豊島祐昌(事務局)、平田 肇(事業)、藤田良能(広報)、山口雅生(技術)
- ・ 支部監査 木坂洋司、富島誠司
- ・ 顧問 北内博堆

4. 各委員会構成

技術委員会 委員長 本郷智之 副委員長 山口雅生、富島誠司 (主査 ○印)

・構造計画分科会 ○山口雅文、飯嶋俊比古、遠藤茂之、勝股浩二、桐山宏之、佐橋睦雄、下川隆司、藤田良能

・鉄骨分科会 ○富島誠司、桐山宏之、富田博明、中塚隆広、橋村一彦、原 孝文

・鉄筋コンクリート分科会 ○野田泰正、岩井武夫、遠藤茂之、崎元隆一、中村 修、深尾肇章
分科会 渡辺誠一

・基礎分科会 ○木坂洋司、大野富男、小寺徳郎、佐橋睦雄、杉山秀八、鈴木 勉、本郷智之

事業委員会 委員長 森田富士男 副委員長 平田 肇

松久哲雄、浅井敏司、嶋谷和彦、橋村一彦、長谷川勇、宮田正明

広報委員会 委員長 藤田良能 副委員長 遠藤茂之

岩井武夫、青山邦男、飯嶋嶋俊比古、木坂洋司、佐々木貴司、平田 肇

支部の動き

6/24 構造家懇談会中部支部平成元年度支部総会

(社)日本建築構造技術者協会支部設立総会

■事業委員会

6/22、6/27、7/3

9/28 (社)日本建築構造技術者協会支部設立記念講演会

(社)日本建築構造技術者協会支部設立記念パーティー

■設立記念行事実行委員会

7/5、7/20、8/2、8/10、8/25、9/7、9/13、9/19、9/21、
9/22、9/25、9/26

理事会(構造懇)及び役員会(JSCA)

4/19 63年度支部活動報告及び同決算報告

平成元年度支部活動計画及び同予算

■技術委員会

5/22 法人化に伴う正会員増員計画

(社)日本建築構造技術者協会中部支部規定
支部総会、設立総会及び同議案について

8/13 技術委員会運営計画 設計御紹介 他
9/22 各分科会運営方針 設計御紹介 他

計画分科会 9/11、10/16、鉄骨分科会 10/30

RC分科会 9/8 基礎分科会 7/2、9/14

6/24 J S C A(本部)理事会報告

支部総会及び設立総会について

■広報委員会

10/20 J S C A(本部)理事会報告

支部設立記念行事報告

7/28、8/9、9/7、9/14、10/4、10/17、10/21

新日鐵の新しい建築用鋼材

ハイパービーム

同一シリーズ内 梁成一定(ウェブ高さ一定)のハイパービームは、ウェブ厚みも従来のH形鋼に比べはるかに薄く軽量化されました。シリーズ・サイズも大幅に増えて、設計もより自由な発想が期待されます。

また、溶接組立材よりトータルコストが安く、しかも熱間圧延による安定した品質で寸法・形状精度の高い、より信頼される建築鉄骨用素材として御愛用いただけます。



東京本社:東京都千代田区大手町2-6-3(新日鐵ビル)〒100-7103(242)4111
名古屋支店:愛知県名古屋市中村区名駅南1-24-30(三井ビル本館)〒450-0521(58)02111